

手がとどかなかった「新聞」

私は、朝起きると先ず新聞を見る。それが日課である。したがって、新聞の来ない日はさびしい。もう新聞の無い生活は考えられない。このように、きっても切れない関係の新聞も、長い付き合いかというところとも言えないのである。勿論、昭和のはじめころからわが家に入っているから、半世紀以上の付き合いと言うことになるが、新聞そのものは一世紀以上前から、岡山でも発行されていたのである。そこで、わが家になぜ新聞が届かなかったか、というよりなぜ新聞が購えなかったかを考えてみることにする。

岡山では、明治12年(1879年)1月「山陽新報」(現在の山陽新聞の前身)の第1号が発行されている。当時の新聞の大きさが、タテ1尺1寸・ヨコ7寸3分(約36×25cm)で、タブロイド版より小さく、現在の新聞の半分ぐらいだったとか。そして、新聞一枚の値段は、1銭5厘(1か月前金の場合は32銭、市外は郵送料が1か月25銭加算)である。

新聞代って、たった1銭5厘かと思われるかもしれないが、当時の警察官(巡査)の初任給が月額4円(蓬郷 巖著「岡山県庁ものがたり」による)だったということから、新聞代が32銭としても、月給の8%にあたる。現在の新聞は、朝刊で24頁から32頁建の組版で、しかも一部100円くらいだ。情報量も多くなっているが、広告のスペースも多いため、このため、日給1万円の労働者でも新聞代は給料の1%に過ぎない。当時の新聞代が相対的にいかに高価なものであったかが知れよう。この地方の農家では、当然に手が出せる状況ではなかったことはいうまでもない。

そればかりでなく、「御一新」と言うことで諸制度はもとより、世の中の事情がどんどん変わってゆくので、田舎者にとっては、今までの常識は役にたたず、新聞の高級な論説は理解できなかったということもあろう。とにかく、新聞は、縁なき存在だったと思う。

明治25年(1892年)7月には、岡山にさらに山陽新報のライバル社として「中国民報社」が生まれる。そして、それから「山陽」・「中民」の両紙が社運をかけて、よい意味での競争をするようになる。したがって、どちらもよい新聞を出そうと苦心し、購読者を増やそうと努力するので、発行部数は急速に増えたようである。特に、日露戦争が始まると、戦況ニュースに関心が高まり購読者が急増して、明治39年には、山陽新報の発行部数も4万部を越すほどになったと言う。(注1)

大正12年の関東大震災は、特大ニュースになったと思うが、新聞のないわが家では、当時それについての話はなかった。その頃には、田中野田でも医師をしておられた原正雄先生や他に数件のお家に新聞を取っておられたのではないかとと思われるので、関東大震災は大きな話題になった筈だと思ったのだが、私にはほとんど記憶がないのである。もっとも、それは私の6歳の頃だったから、大人の話はわからなかったのかも知れない。

大正11年か12年頃には、私の家でも自転車を買っている。アメリカ製で価格も100円だったと聞いている。(注2)また、大正13年頃、和気 岩夫さんが石油発動機や関連機器を田中野田で初めて買われた。(その後この地区で石油発動機が急速に普及するのだが……このことはすでに書いた)自転車にしても発動機にしても、生活に便利で仕事の能率があがるとなると、“金のことは言うておれん、道具を買ってやらないと若い者が働かないようになる”という時代になってきた。

そして、大正14年(1925年)、普通選挙法が成立して25歳以上の男子に衆議院議員の選挙権が与えられた。そうすると、皆が政治に関心を持つようになる。わしは政友会が好きだ。わしは民政党を応援するぞという声もでる。山陽(山陽新報)は政友会系じゃ。中民(中国民報)は民政党系じゃそうとか、いろんなうわさが流れたりする。新聞社もここぞとばかり、あの手この手で購読者の拡張に乗り出す。あの家にとれば自分の家にもというようになって昭和の初め頃には大抵の家に新聞を買うようになった。文明開化の余恵が半世紀にしてようやくこの地方にもおとずれたことになる。

昭和11年には当局の勸奨で、山陽新報と中国新報は合併して、名前も、「山陽中国合同新聞」となった。戦後、合同新聞を「山陽新聞」に改め今日に至っている。現在同社の発行部数は、40万部を超えているそうだ。

新聞は社会の木鐸といわれているが、新聞業界も時代の移り変わりを反映して動いているのである。

注1 山陽新聞の創刊時の発行部数は、600とか、また、明治37年に1万部を突破したという。(岡 長平「岡山始まり物語」による)

注2 当時の100円を米の値段で現在の価格に換算すると、およそ20万円くらいになる。今の高級自動二輪車なみである。

なお、自転車による新聞配達は、明治33年に始まっているがその自転車もアメリカ製で一台が173円(現在の私の推定価格で約40万円)であったと、「岡山始まり物語」に書かれている。

平成7年7月号 第35号
(中 尾 佐之吉)